

かりませんが、でもぼくは、そうした弱さを含めて、ぼく自身がこの詩集に限りなく共感するよう
に感じています。

とは言っても、すべてを描いて美しく感じるの
は、『Ambarvalia』の、たとえば「……静かな
庭が旅人のために眠ってゐる。／薔薇に砂に水／

薔薇に霞む心／石に刻まれた髪／石に刻まれた音
……」（「眼」というような、硬質の、強く、光
輝くことばです。いつか、扉のページに「薔薇に
砂に水／薔薇に霞む心」というエピソードを刻ん
だ本が書けることがあるだろうか、というのが、
ぼくの「夢のように美しい」一つの夢想です。

（文筆業）

激動の時代を生きた女性たち

牧野 カツコ

夏休みは、どっしりした本を読むのに最適で
す。読みごたえのある本を三冊、ご紹介したいと
思います。いずれも、近代から現代の激動の時代

を生きた女性が主人公のノンフィクションです。
それぞれ中国、韓国・朝鮮、ヨーロッパがその背
景ですので、もしも三冊を全部読まれるなら、世

界や歴史を多面的にみる事ができると思います。日本人にとっては、学校の授業や受験勉強での歴史ではまったく学ばなかった事実、新聞やテレビなどからも知ることのできない歴史を知る驚きと感動があります。そして何よりも、すさまじい激動の歴史の中を生き抜いた女性達の知恵と強さと美しさに圧倒されます。

一冊は、もうお読みになった方も多いかも知れません。ユン・チアン 土谷京子訳 『ワイルド・スワン』上・下（講談社）です。

中国人である著者の祖母、母、著者自身の三代にわたる女性の物語。この物語の背景は、清朝末期の二〇世紀初頭から日本が支配した満州国時代、中華人民共和国の成立、文化大革命の時代と続く、まさに激動の時代です。著者によれば「異常な時代と異常な社会」であり「とほうもなく残酷な時代」でした。この残酷な時代の流れの初めには日本軍の満州侵略などがあり、隣国の日本と

無関係ではありませんが、毛沢東時代の中国については、西側の人々にはこれまであまり知られていませんでした。「人々が恐怖におびえて口を開かなかったこと」と情報が国家によって統制されていたことによりますが、とりわけ文化大革命の異常な時代については、この本で初めて知ることばかりで、本当に衝撃の連続です。

書名の「鴻」（ワイルド・スワン）とは、著者のお母さんの名前ですが、物語の大半が、すさまじい時代を生きぬいてきたこの母親の人生を描いたものとなっています。異常な時代のなかで人間がいかに残酷になり得るかを知り戦慄を覚えるとともに、異常な時代に翻ろうされながら、極限状況のなかで、なおかつ崇高な人間性を保ち続けて生きた「鴻」や著者の父親たちの勇氣と美しさに感動の涙がとまりません。訳者の土谷京子さんも書いておられるように、これほど残酷で苛酷な時代を描いているのに、本書の全体は「人間の精神

に対する希望と信頼」が描かれて、「あたたか
く、すがすがしい」のです。

著者のユン・チアンはロンドンに移り住んで十
年以上が経ち、この本も英語でアメリカとイギリ
スで出版され、多くの国で翻訳出版されてベスト
セラーとなっているものの、中国ではまだいまの
ところ出版される予定ではないとのことです。毛
沢東時代の「恐怖」の事実をこのようにありのま
まに伝えられる時代となったことをうれしく思う
とともに、お母さんが中国の成都に健在でおられ
るといふことを喜ばずにはいられません。歴史の
遙かかなたにおこったようなできごととは現代ので
きごとと他ならないのです。

次にお薦めの一冊は、角田房子『閔妃暗殺―朝
鮮王朝末期の国母―』（新潮社）です。韓国の人
なら誰でも知っている閔妃（ミンピ）暗殺事件を
描いたノンフィクションで、第一回新潮学芸賞を
受賞した本です。李氏朝鮮王朝末期の、こちらも

激動の時代を生きた王妃は一八九五年（明治二十
八年）日本人暗殺者集団の手により殺害され、四
十四歳の生涯を終えています。戦後五十年を経て
未だにぎくしゃくとしている日韓関係の近代史を
知るために、ぜひとも読まねばならぬ本ともいえ
ます。

韓国の人ならだれでも知っているというこの閔
妃暗殺事件について、日本人はほとんど学ぶ事
がありません。今や近くて安い観光地としてソウル
へ多くの日本人が押しかける時代となりました。
ソウルの中心にある景福宮には、日本人観光客は
必ず訪れますが、官庁街の大通り世宗路の突き当
りにある景福宮の正門——光化門は、日本人暗
殺者集団が閔妃を暗殺するために乗り越え、なだ
れ込んだ門なのです。広大な景福宮の中に「明成皇
后遭難の地」と書かれた石碑があり、王妃が日本人
暴徒の日本刀を肩に受けた血まみれの姿の絵があ
り暗殺の現場を示しています。私は二年ほど前初

めて、韓国に調査の仕事で行く機会があり、景福宮を韓国のガイドの人に案内してもらいましたが、日本人にはその場所を観光コースから外していました。閔妃暗殺のことは、帰ってから教えてもらい、読んでおくべきであったと悔やまれたのです。

本書を読むと、この暗殺の背後に明治政府の意図があったこと、そしてその後の日本の急速な朝鮮侵略、日韓併合へと歴史が展開して行くことがよく分かります。著者の角田さんは、隣国である韓国へ実感の伴う「遺憾の念」を持ち、それを基とした友好関係、相互理解を深めて欲しいと述べておられますが、その通りと思います。

三冊目の本は、塚本哲也『エリザベート・ハプスブルグ家最後の皇女』（文芸春秋）です。ハプスブルグ王家フランツ・ヨーゼフ皇帝を祖父に、一九世紀末ウィーンで男爵令嬢と心中した皇太子ルドルフを父に生まれた皇女エリザベートの波乱

に富んだ一生を描いたものです。最近ハプスブルグ家やエリザベートについて書かれた紹介書が、幾つか出版されていますが、この本は新聞社の特派員として、かつての大ハプスブルグ帝国の首都であったウィーンに住み、プラハを始め中央諸国、北イタリヤ、バルカン、ウクライナなど本書に登場する主要な都市を訪れた著者によるもので、ジャーナリストとしての冷静な目で、欧州の近代史を克明に描き出した大作です。なかなか読みごたえがあり、第二十四回大宅賞を受賞しています。第二次世界大戦は日本人は、日本の側から見た歴史しか学ぶ機会がないのですが、この本ではヒトラー・ナチス、スターリンの野望に翻弄される悲劇の都市ウィーンが描かれ、プラハ、ブダペストの動乱や、第二次世界大戦の悲劇を欧州の側から知る事もできます。

一度ヨーロッパを旅行してみると、あらゆる場所に今なおハプスブルグ王朝の影響力が残ってい

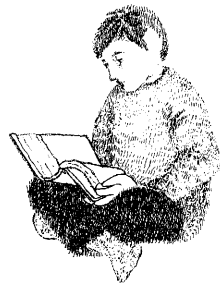
ることを思い知ります。ハブスブルグ家とは何であったのか、政治の真ただ中で巨大な権威と権限を行使してきたヨーロッパの王家や貴族の伝統や格式、そして帝国の崩壊と王家の没落の激動の中に生きた王女の生涯を知るとは、興味がつきません。

中国、韓国・朝鮮、そしてヨーロッパの激動の歴史を生きた女性の人生は、私たちの平和な日常とはあまりにも掛け離れているかも知れません

親子……そして教育

が、時代と国を越えて共通する人間の生き方に打たれます。お薦めしたい三冊です。

(お茶の水女子大学)



鈴木 みゆき